

文学博士石田尚豊君の「曼荼羅の研究」に対する

授賞審査要旨

本書は、表題は「曼荼羅の研究」とあるが、その内容は、日本に伝えられている密教曼荼羅 (Mandala) 以下マンドラと仮名書きする) の成立過程に関する画像学的研究である。

従来、恵果・空海以前の前期正純密教の研究はややもすれば等閑に附せられていた感があった。著者はこの点に顧み、本書において、恵果・空海以前の密教のマンドラなる胎藏圖像 (善無畏作、円珍請来)、胎藏旧図様 (不空、若しくは不空の流れを汲む者の作かと本著者はいう、円珍請来、以下旧図様と略書)、及び金剛界系の原初形マンドラなる五部心観 (善無畏が金剛頂經の梵本に依って作ったものと本著者は見る) 等を重視し、それらと現図の胎藏・金剛両マンドラ (何れも空海請来)、並びに其の他関係深き諸種マンドラ等とを相互に比較検討し、関係経軌とも照合しながら、全体の組織についても、一々の圖像についても、画像学的に精密に究明し、正純密教マンドラに関する前期より後期にわたっての成立過程の解明に努め、以て密教の史的研究に資せんとしている。

本書は研究篇と図版篇とから成る。その図版篇においては、その研究資料として、自作の胎藏マンドラ諸尊配置図と、古来の秘宝なる諸種の古写マンドラ図を、何れも鮮明な影印により掲載して参考に供している。その研究篇では、概略次の通りの論述をする。

第一章 胎藏マンダラの概観(頁一一―一四)。ここで著者は胎藏マンダラを二つの系統に分けて見ている。即ち、A 善無畏系Ⅱ文殊部を内に、釈迦部を外にする、胎藏図像はこれである。B 不空系Ⅱ釈迦部を内に、文殊部を外にする、胎藏旧図様と現図胎藏マンダラはこれである、とする。

第二章 中台八葉部(頁一五―二八)。著者はここで金剛界系の五部心観(特にその四印会の諸尊像)が、胎藏旧図様に影響していることを指摘する。

第三章 観音部(頁二九―四五)。ここでは著者は、旧図様の観自在菩薩は五部心観など金剛界系の像に近く、胎藏図像のそれとは異なることに注意する。又旧図様において、円珍が唐において弟子豊智と共に記入した尊名に矛盾の多いことを指摘し、それぞれ訂正するとともに、大正藏経図像部第二卷所収の胎藏旧図様の尊名は、この円珍記入の誤りをそのまま踏襲しているのも、同じく訂正すべきであると指示する。なお、以下の第四章金剛部、第七章除蓋障・虚空藏・地藏部においても同様の誤記あるを指摘訂正し、併せて大正藏経の其の処の誤りの訂正を要求している。この一連の提言は本著者の功績の一つである。

第四章 金剛部(頁四七―六七)。著者はここで前記の円珍の誤記指摘の外に、旧図様には諸尊の持物を省略する原則のあることに注意している。更に、胎藏図像における金剛部の主尊なる金剛藏が、廣大儀軌では、名は金剛手となるが、像は胎藏図像と同じく鈴を持たない。現図胎藏マンダラでは名は金剛薩埵となるがやはり鈴を持たない。然るに旧図様では名は金剛手で、鈴を持つ、即ち現図金剛界マンダラの金剛薩埵である。ここに金剛界系マンダラの旧図様への浸透が認められるとする。

第五章 遍知部（頁六九―八一）。遍知部の救世仏菩薩は胎藏圖像では如来毫相であるが、旧図様になると不空訳の二経（八大菩薩曼荼羅經と般若理趣經）に依る虚空藏菩薩となる。更に旧図様の遍知部には金剛界系の四波羅蜜菩薩が入り来っている。ここにも旧図様に金剛界系の像の流入があることを注意している。

第六章 持明部（頁八三―九三）。ここでは般若菩薩に関して触れ、本来持明部には胎藏圖像でも旧図様でも、ただ不動・降（勝）三世の両明王のみであったが、廣大儀軌では般若妙妃を含む五大尊となり、現図胎藏マンダラではこれを受けて般若菩薩を五大尊の中央に位置せしめることになったとする。

第七章 除蓋障・虚空藏・地藏部（頁九五―一二一）。著者はここでも先に記した如く旧図様の円珍誤記の諸尊名を大きく訂正すべきを指摘し、又胎藏圖像に宝掌、現図に不思議慧とあるは何れも除蓋障であり、旧図様の大日直南門虚空藏とあるは除蓋障と訂正すべきであるとし、かくて古来のマンダラにも除蓋障部（院）と云いながらその主尊の除蓋障菩薩が見出せなかったという難問を解決した。それと共に旧図様の地藏部諸尊中に、及び現図胎藏マンダラ地藏部中に金剛界系マンダラからの流入が見られるとする。

第八章 釈迦・文殊部（頁一二三―一四八）。その文殊の眷属群については、胎藏圖像及び旧図様中には、従来尊名が殆ど不明のままのものがあったが、著者は諸種経軌の三昧耶形を通して手がかりを得ると共に、其の他の胎藏マンダラの尊位配列を総観することによって、不明の尊名を明らかにし、ここで胎藏圖像、旧図様、現図の三本間の圖像対照表を出し、併せて旧図様や現図における尊名の訂正すべきものあるを指摘している。

第九章 天部（頁一四九―二二五）。天部に関しては胎藏圖像と旧図様と現図との関係を八項に分けて詳論してお

り、その中には傾聴すべきものが少なくないが、特にその第七項では「四種護摩本尊及眷属画像」（弘仁十二年智泉画）の再認識を提唱し、これと関連して第八項では青蓮院伝来の「白描金剛界曼荼羅諸尊図様」（請来は円仁か或いは最澄かという）の八天について紹介し、これらは旧図様から現図に至る過渡的な天部像を示すものとして注意を喚起している。

第十章 三本マンダラの特性（頁二二七—二五四）。ここでは三本マンダラの特性や問題点について総合的に考察しているが、その中には上来の記述と重複する所もあるので、そこは省き、最後に著者が、不空訳の撰無礙経と法華曼荼羅威儀形色法経とが、現図の金剛・胎藏両マンダラの各尊の像様の所依の經典となっていることを指摘している。は、特記すべきである。

以上の如く著者は密教マンダラの成立過程に関する図像学的研究において、幾多の注目すべき成果を挙げている。もとよりそれには二、三の先匠の業績と示唆とに負うところ少なくないが、しかし先人の未だ気付かなかった点にも注意し、未だ達し得なかった域にまで達している。ただ、マンダラの研究としては、著者は図像そのものの考察に終始し、その芸術としての表現や様式の研究には欠ける所なしとしない。なお梵語の表記等に多少の瑕瑾もある。しかし全体として本書は密教マンダラの図像学的研究をほぼ大成し、いくつかの新見解を披瀝する等、斯学の進歩に寄与する所大である。